



Title	“Rep & Rev” and Its Echoes: A Dramaturgical Analysis of Suzan-Lori Parks’ s Historical Plays
Author(s)	田所, 朱莉
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92233
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (田所 朱莉)	
論文題名	“Rep & Rev” and Its Echoes: A Dramaturgical Analysis of Suzan-Lori Parks’s Historical Plays (「反復と改訂」とそのエコー ——スーザン＝ロリ・パークスの歴史劇におけるドラマツルギーの分析)
論文内容の要旨 スーザン＝ロリ・パークスは、「反復と改訂」と呼ばれるドラマツルギーを用いて、舞台上での「歴史の書き換え」を試みる劇作家として評価されてきた。しかし、その具体的な方法論については、十分に明らかにされていない。本論文の目的は、観客論・劇構造・劇作法を視野に入れて議論を進めることで、「反復と改訂」の詳細なメカニズムと、永続的な「改訂」のプロセスを稼働し続けるためにパークスが行う仕掛けを明らかにすることである。 序論では、パークスが歴史表象の様式を利用する点に着目する。「歴史」がどのように編纂されてきたかを確認し、「反復と改訂」という様式が、元来歴史物語の中に埋め込まれている可能性を指摘する。本論では、改訂のメカニズムを永続的に反響し続ける「エコー」という比喻と結びつけながら、パークスがどのように「歴史物語」が元来持つ「改訂」の作用を稼働・加速させるのかを論ずる。 第1章では、劇作理念が最も前景化された『アメリカ・プレイ』（1994）における「エコー」に焦点を当てる。まず時間を円環的なものとするパークスの認識に基づいて、ファウンドリング・ファーザーのパフォーマンスが、過去の歴史認識に影響を及ぼし、書き換えられた歴史認識が、現在／未来におけるパフォーマンスに作用するのではないか、という仮説を打ち出す。その証明を行うなかで、過去の歴史を目に見える形で表象しようとする力が働く限り、誰にも予想できない形で、歴史表象的アイコンが生み出され続けるというプロセスを明らかにする。 第2章では、「断片の再構築」をメタ的なレベルで行う『ヴィーナス』（1996）を取り上げ、「切断」をキーコンセプトとして論じる。本作は、「ホッテントット・ヴィーナス」の呼び名でフリークショーの見世物にされたサラ・バートマンの半生に基づく。パークスによるヴィーナスの再表象を、まなざしの向けられ方、ダブリング、現代の観客を巻き込むような劇的技巧と絡めて論ずる。さらに、劇構造に着目することで、過去の歴史・現代の観客の全てがパークスの創作へと取り込まれていくことを明らかにする。つまり、上演される限り、全く新たなバージョンが生み出され、ヴィーナスの物語は改訂され続けるのである。 博士論文の後半では、「文学史」への書き換えへと焦点を移す。第3章では、『緋文字』の「リフ」として知られる『イン・ザ・ブラッド』（1999）を取り上げる。“A”の文字を『緋文字』へと感染し、宿主のあり方を突然変異させるウィルス的なものとして捉え、両作品の相互作用を論じることで、本作を文学史そのものの書き直しを目指す劇作品として位置づけ直す。さらに、“A”の意味がウィルスのように自己増殖を続けていくことから、その意味を確定させることは出来ず、“A”とヘスターの再解釈が永続的に続くことを明らかにする。 第4章では、『父が戦場より帰還する 第一部・二部・三部』をパスティーシュ歴史劇として位置づけ直すことで、パークスが既存の歴史のありかたをランダムに、そして絶え間なく改訂し続ける劇作を行っている可能性を模索する。黒人奴隷ヒーローの自己形成、パークスによる視聴覚的劇操作、先行文学テキストの断片が埋め込まれた劇構造に着目し、先行テキストの断片が変容していくプロセス、および南北戦争の歴史物語が複数の物語へと自己増殖を続けていく点を明らかにする。 パークスによれば、自らの仕事は「歴史を書き換えること」である。しかし、彼女が舞台上で行うのは、「完全な書き換え」ではなく、「歴史の再構成」であると考えられる。パークスは、過去の物語を破壊するのではなく、それを現代の演劇の礎石とする。パークスが埋め込んだ歴史上・文学史上の断片とアフリカ系・アメリカ人の歴史の断片は、混交し続け、そのプロセスの中で、永続的な「反復と改訂」のメカニズムが稼働していくのである。いわば、パークスが舞台上で創造するのは、ハイブリット的な劇作品である。さらに、パークスが創り出した演劇作品も、ひとつの「歴史物語」である。つまり、パークスの創作もまた、パークス自身、もしくは他の作家／劇作家によって改訂されていく可能性を孕む。パークスの劇作そのものが、さらなるエコーを生み出し、永続的な歴史の「反復と改訂」のメカニズムを稼働し続けるのである。パークスは「歴史物語」が「反復と改訂」の性質を持つという事実を明らかにしつつ、白人優位の言説を脱したオールタナティブな歴史物語を紡ぎ続けるのである。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (田 所 朱 莉)			
論文審査担当者	(職) 氏 名		
	主 査	准教授	岡本 太助
	副 査	教授	渡邊 克昭
	副 査	教授	中村 未樹
	副 査	教授	畑田 美緒
	副 査	名誉教授	貴志 雅之

論文審査の結果の要旨

本論文、""Rep & Rev" and Its Echoes: A Dramaturgical Analysis of Suzan-Lori Parks's Historical Plays" は、現代アメリカ演劇を代表する劇作家スーザン＝ロリ・パークス (Suzan-Lori Parks) の演劇作品のうち、歴史的事件や歴史記述をテーマとする「歴史劇」を対象に、作家の劇作法の特徴である「反復と改訂 (Rep & Rev)」というメソッドを批判的に検討するものである。パークスが劇作を通じて「白人優位の言説を脱したオルタナティブな歴史の創造を試みる」という点は、これまでの研究でも指摘されてきたが、本論文はパークスによる歴史の書き換えを、完結することのない半ば永続的なプロセスと捉え、その永続のプロセスを駆動するメカニズムを明らかにしようとする点で、その問題意識と研究の射程において先行研究にはない独自性を有している。歴史と文学史双方における過去が舞台上の現在において反復され書き換えられるこのメカニズムを、本論文はまず「原因がなくなった後も続く効果」としての「エコー」のイメージを用いて説明しようと試み、さらにそうした「反復と改訂」は対象となるものに外部から作用するというよりも、対象となる歴史と文学史の物語そのものに含まれるものと見なす。つまり、パークス劇は歴史・文学史テキストから響いてくるエコーとしての「反復と改訂」を増幅し加速するものであり、それがさらに別のエコーを生み、さらなる「反復と改訂」を誘発するかぎりにおいて、パークス劇における歴史の書き換えもまた終わりのないプロセスであると言える。本論文は、具体的な作品分析を通じてこの論点を例証するものであり、その内容はアメリカ演劇およびパークスの研究にとっても非常に有意義かつ高い学術的価値を有していると言える。

論文全体は序論と結論を除き4章で構成されており、前半の2章が主に歴史物語に対する「反復と改訂」、後半の2章が文学史に対する「反復と改訂」にフォーカスするものとなっている。第1章「「反復と改訂」の永続的プロセス——『アメリカ・プレイ』におけるエコー」("The Ever-lasting Process of "Rep & Rev": Echoes in *The America Play*") は、永続的に作用し続けるものという、序論において示された「反復と改訂」の性質を、初期の代表的作品『アメリカ・プレイ』 (*The America Play*) における「エコー」に着目しながら例証する。リンカーン暗殺の場面をテーマパークのアトラクションとして再現する男と、その男の残した痕跡を探して穴を掘るその息子および過去から響いてくるエコーに耳を澄ます彼の妻を主な登場人物とするこの劇について、本論文は、歴史をレプリカから別のレプリカが再生産されるプロセスとして捉え、また歴史の「反復と改訂」において再生産される大統領のイメージそのものにも、そうした終わりのないプロセスを誘発する流動性があることを明らかにしようと試みる。聴覚的なものとしてのエコーのみならず、視覚的イメージもまたある種のエコーとして観客に知覚される

と言えるが、そのような知覚行為は観客の中に心的イメージを生じさせ、それが写真や肖像画のような元々存在していたイメージの認識され方に影響を与える。本章は、イメージの伝達のこうした円環的な構造を歴史記述の問題に敷衍することで、代表的人物などのイメージによって構成されている歴史物語を現在において反復しつつ書き換えることが可能になる根拠を説明しようと試みている。また本章は、「エコー」や「反復と改訂」の永続性という論文の中心テーマを具体的に提示するという意味では、実質的なイントロダクションの役割も果たしている。

第2章「舞台上でのヴィーナスの創造——『ヴィーナス』における断片の再構築」("Creating Venus on Stage: Reconstructing Fragments in *Venus*")は、第1章で示されたテーマを、より具体的な劇作技法と結びつけて論じる。19世紀に南アフリカからヨーロッパに連れていかれ、見世物にされ、医学的研究の対象とされた実在の女性の人生を舞台上に再現する『ヴィーナス』(*Venus*)は、現実の歴史において暴力と搾取の犠牲となった人間を再度舞台上で見世物にし解剖するものとして批判する声を含め、パークス作品の中でも特に激しい議論を呼んだ作品である。本章は、主人公ヴィーナス(パートマン)自身の声がほとんど残されておらず、その経験が無数の断片になるまで切り刻まれ歴史から抹消されてしまったことが、現在における大胆な再解釈と再構築、あるいは舞台上でのヴィーナスの「再創造」を可能にしていると見なし、「必ずしも完全には合わないものを組み立てる行為」としての"re-membering"(記憶の喚起/断片のつなぎ合わせ)を行うこの作品が、過去を完結したものではなく、現在にまで続くものとして観客に提示すると論じる。特に、1) ヴィーナスは意思に反して搾取を被った犠牲者であるとする、従来の歴史において史実とされていた人物像が、実際には不十分で断片的な証拠に依拠するものであること、そして2) 劇の構造そのものが、観客がヴィーナスに関する情報のすべてにアクセスすることを不可能にしていること、この2点に着目することで、本章は、この劇が観客を単なる傍観者でなくヴィーナスに対する搾取・暴力・断片化を行う共犯者として巻き込むことで、ヴィーナスの断片化とその再構築というプロセスを上演されるたびに再稼働させると結論づけている。

第3章「感染する「A」——『緋文字』と『イン・ザ・ブラッド』の相互作用」("The Contagious "A"—The Mutual Interaction between *The Scarlet Letter* and *In the Blood*")では、パークスによる「文学史」の書き換えの代表例として、ナサニエル・ホーソーンの小説『緋文字』(*The Scarlet Letter*)を現代の黒人女性の物語として作り直した"The Red Letter Plays"と呼ばれるパークスによる2作の劇のうち、『イン・ザ・ブラッド』(*In the Blood*)を取り上げている。本章は、『イン・ザ・ブラッド』とその「親テキスト」である『緋文字』との関係を「ウイルス」のメタファーを用いて再検討し、両者が相互に感染し変異を引き起こすような関係にあることを明らかにする。たとえば、まず『緋文字』におけるAの文字の多義性は、『イン・ザ・ブラッド』に感染することでさらに元のテキストの文脈を超えた意味を増殖させるのだが、それは同時に元のテキストの「許容される読み」の範囲を作り替えてしまい、『緋文字』の(少なくとも読者の解釈というレベルでの)あり方を変容させてしまう。そしてそのようにして生み出された変異は、避けようもなくその後の『イン・ザ・ブラッド』の読み方に影響を及ぼすこととなり、この場合もやはり複数のテキストが円環的に相互作用しながら次々に新しい意味を生み出していくのであり、本章はその具体例をもって、「反復と改訂」のプロセスの永続性を説明しようとするものである。表面的には、本章の議論は、アダプテーション(翻案)という文学における伝統的形式に潜む、親テキストと子テキストの一方的な関係性という前提に異議を唱え、その文学的伝統を書き換える可能性を探るものであるが、序論において示されていたような、歴史の書き換えの契機は書き換えの対象である歴史物語の形式に元々含まれているという視点に立てば、アダプテーションの書き換えもまた当のアダプテーションの形式にあらかじめ埋め

込まれているということができる。本章もまた、間テキスト的な感染を介して、パークスが「アダプテーションにおける「変異」を利用」し、それを加速するという手法を用いていることを明らかにしている。

第4章「『父が戦場より帰還する 第一部・二部・三部』における白人至上主義の転覆——パスティーシュ歴史劇」("Subverting the White Supremacy in *Father Comes Home from the Wars (Parts 1, 2 & 3)* : Pastiche History Play")は、『オデュッセイア』、『リア王』、『オクラホマ!』などの過去の文学作品や歴史上の出来事の断片をランダムに組み合わせるようにして構成された『父が戦場より帰還する 第一部・二部・三部』(*Father Comes Home from the Wars (Parts 1, 2 & 3)*)を「パスティーシュ歴史劇」と見なし、過去からの情報の断片化、複数テキストの表面的類似性、そしてテキストの断片が亡霊のように他のテキストに憑りつくという関係性などの視点から、本作がいかにして白人と黒人の主従関係を転覆するのかを論じる。具体的には、視覚的に伝わる情報と聴覚的に伝わる情報、そして間テキスト的に参照される他の作品に関する記憶やイメージの間に、観客の認識のレベルでズレが生じてゆくことが詳述されており、本来の歴史や文学史の文脈からは生じえないような意味が観客によって作り出されるということが、本章の特に重要な指摘である。これを文学史の書き換えという視点から言い換えれば、元々は政治的批判のニュアンスを持たないパスティーシュという形式そのものが、観客の認識の変化によって、転覆的な意味合いをもつものへと変化するということである。

以上の議論をふまえ、結論では、パークスにおける歴史物語と文学史に対する「反復と改訂」は明確な終わりを果たず永続的に繰り返されるプロセスであることを再確認し、それまで拾い上げられてこなかった断片を付け加えて反復させることで、歴史物語の書き換え(=rewriting、これには書き換えのプロセスがいつか終わる、完了するという含意がある)ではなく「組み換え」(reconfiguration)を行う点に、パークスの演劇戦略の独自性があると述べている。そのためにパークスが用いる「反復と改訂」は、歴史物語や文学の伝統に内在するものであるとする序論の議論に立ち返れば、パークス劇における「反復と改訂」の対象はその「反復と改訂」という歴史表象の形式そのものであるとする、メタ的な視点が導かれる。さまざまな言説に共通する形式としての「反復と改訂」を劇作のターゲットとするパークスにとって、「白人／黒人」、「過去／現在」、「親テキスト／子テキスト」といった二分法は意味をなさない。彼女の劇作は、それら相反するように思われる物事を混在させた新たな歴史物語を創造する営みであり、それ自体もまたさらなる「反復と改訂」に対して開かれている。本論文は、パークス劇の歴史／文学史における立ち位置をあらためて明確化することにより、彼女のドラマツルギーである「反復と改訂」、そしてそれを用いて彼女が行う歴史の書き直しが、永続的なプロセスとならざるをえないことを論じてみせている。

審査委員からは、「エコー」という概念の理論的裏付けや論証性の検討が不十分であるとの指摘がなされた。たとえば、エコーは基本的に直線的なもので、同じことの繰り返しであるし、繰り返すたびに少しずつ減衰するものであるから、循環しつつも前に進んでゆくようなものとして「反復と改訂」を論じることと必ずしも相性がよいとは言えず、むしろ、各論で用いられた「ゴースティング」や脱構築、あるいは(明確に言及はされなかったが)シミュラクル論など、より適切な概念を探るべきであるとの意見が出された。また、論文の中では歴史や文学史というのがアメリカ史やアメリカ文学史に限定されていないように思えるが、ある程度範囲を絞り込んで議論する方が、論としてのまとまりが作りやすいという指摘もあった。執筆者の中に、パークスについての議論が様々な作家や作品にも当てはまるかのような無意識の前提があると思われるため、歴史や文学史について体系的に知識を深めることで、パークスを相対化し、それによってパークスの独自性をより説得力をもって論じられるようにすること

が求められる。

今後改善してゆくべき点が浮き彫りになったが、執筆者もそれらについて十分に自覚しており、今後の研究計画もかなり具体的に立てられている。全体としては論の運びが丁寧で、英文も水準が高く議論を的確に伝えるものとなっており、アメリカ演劇および個別の作家研究の新たな可能性を指し示している点でも、今後のさらなる発展が期待できる。自身の立論の問題点を客観的に把握し、他者の意見にも真摯に耳を傾け議論を進めてゆく姿勢および斬新な切り口を発見する能力の高さから、執筆者がアメリカ演劇研究に関して抱く問題意識と研究者としての資質が窺える。

上記考査に基づき、論文の内容、文章表現、研究上の意義等を総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。